



あねスポッ!  
お姉ちゃんと体育祭

青橋由高

illustration ©シコルスキー

美少女文庫  
FRANCE  SHOIN

## スローク 弟想いは三者三様

弟が我が家に帰ってくるというその日の朝、長女はいつもより早く目が覚めた。普段なら目覚まし時計が鳴ってもなかなか起きないのだが、この日ばかりは違う。

(帰ってくる……アイツとまた一緒に暮らせる！)

可愛い弟と再び同じ屋根の下で暮らせると思うと、興奮して寝ていられなくなる。

しかし、まだ起きるには早すぎる時刻だ。妹たちもまだ寝ているだろう。かといって、もう一度寝るなど不可能だ。

(……よし)

彼女はベッドから起きあがると、ぬいぐるみや酒の瓶、アクセサリー、ワイングラスなどが一緒に並べられている棚の扉を開けた。そのなかから、四体並んでいるけしきの一体を取りだす。

こけしは小振りで、胴まわりは太いマジックペン程度だ。頭部には素朴なタッチで少年の顔が描かれている。

「カズう……ちゅっ」

長女はそのこけしの顔にキスをする、自らの乳房を揉みはじめた。タンクトップを大きく押しあげている発達したバストをやや乱暴にこねまわす。

「んっ……はあ、んん……ちゅ……ちゅっ」

もれでる喘ぎ声を封じこめるようにこけしにキスをつづけつつ、今度は手を胸から下へと移す。彼女の下腹部を覆うものはシヨーツ一枚だけだ。

（やだ、もう濡れてる）

シヨーツのなかに手を潜らせると、そこは早くもぬるりとした液体で濡れていた。

狭穴を指で入念にほぐすと、こけしを濡れた膣口にそつとあてがう。男性器と比べとひとまわりは細いこけしだが、挿入は慎重に行なう。

（ああ、入っちゃう……カズが私のアソコに入ってきちゃう……！）

ゆっくりと膣道に収めると、長女はこけしをいじりはじめた。円を描くようにこけしを動かすと、彼女の全身に鮮烈な快感が駆け巡る。

「ひうっ！ あっ、ああうっ！」

両脚を大きくひろげ、腰を浮かすというふしだらな格好のまま、こけしをいじりつ

づける。凹凸おうちのない胸部分が、長女の敏感な粘膜かくはんを攪拌する。

(カズ、カズう！ ああつ、お姉ちゃん、カズに犯されてる、弟にオマ×コいじめられてるう！)

目を瞑り、いつものように淫らで背德的な妄想に意識を飛ばす。

(そこ、そこがイイの、お願い、お姉ちゃんの子宮、もつと突いてえ！)

こけしを押しこみ、コリコリとした子宮口を軽く突く。粟立つような快感に、恥ずかしい声がとまらなくなる。

「イイ、カズの、イイツ！ ダメ、イク、イク、イク、お姉ちゃん、もうイツちゃうつ！」  
妹たちに聞かれてしまうとは思いつつも、一度上昇をはじめた快感曲線はとめられない。腰をカクカクと揺すりながら、長女は早くも絶頂に到達してしまう。

「アーツ、イク、イク……ウ！」

細身のこけしをすさまじい膣圧で締めあげながら、長女は甘美な悦びに肢体を痙攣けいれんさせた。

弟が我が家に帰ってくるというその日の朝、次女はいつもどおりに目が覚めた。

(……今日。弟くん、帰ってくる)

壁にかけてカレンダーを見る。今日の日付には赤ペンで大きく丸がついている。

遠い北の大地からようやく最愛の弟が帰ってくるこの日をどれだけ待ち望んだことか。

(今夜はいっぱいご馳走。カズくんの大好きなおかず、たくさん作る)

あの可愛い弟はきつと美味しそうに食べてくれるはず。今夜、久し振りにあの笑顔を見られると思うと、次女はそれだけで興奮してしまう。

(……あ。弟くんの笑顔を思い出したら……変な気分になっちゃった)

一度はベッドから起きあがった次女は再び横になると、パジャマのなかにそつと手を差し入れた。

「……んっ」

右手で乳房を、左手で股間を軽くまさぐる。

「あっ……んふ……んは……っ」

次女が自らを慰めることを覚えたのは、もう何年も前になる。が、右手に触れる胸の膨らみは、その頃からほとんど変わってない。女の手でも簡単に包み隠せてしまうほど慎ましやかなバストが悲しくなる。

(弟くん、こんなおっぱいは嫌い……? ごめんね、おっぱいの小さなお姉ちゃん)

心のなかで可愛い弟に詫びながら、小さいながらも敏感な乳房を激しく揉む。むくりと膨らんだ乳首を指でこねまわしつつ、反対側の手で狭い膣穴の入り口付近をいじ

る。

「あつ、カズくん……あつ、はああうっ！」

桜色の乳首や包皮に包まれたクリトリスに指が触れるたびに、次女はベッドの上で身をよじり、甘い声をあげた。

（ダメ、姉さんたちに聞こえちゃう）

この家で一番早く目が覚めるのは自分だし、姉も妹も、多少の物音で目が覚めるタイプではない。だが念のため、次女はパジャマの上着を口に咥えて声を噛み殺そうとする。

（カズくん、早く帰ってきて……あつ、ああつ……！）

パジャマを噛みしめながら、オナニーに耽る小柄な少女。

「んふっ、ふっ、んふうううっ！ んんんっ、ふうううんっ！」

ビクビクと痙攣するたびにシートに皺がひろがっていく。

整った顔立ちが汗で妖しく光る。

「んふっ……んっ……んんーっ!!」

ひとときわ大きなくぐもり声とともに、次女の肢体がベッドの上で跳ねあがった。

（やっ……イクっ……お姉ちゃん、もうイク……っ!!）

脳裏に弟の笑顔を思い描きながら、次女はパジャマをきつく噛みしめた。声を必死

にこらえたまま、絶頂の悦びを全身で受けとめる。

「カズくふうん……」

遠くで鳴っている目覚まし時計の音を聞きつつ、少女は甘えた声で弟の名を呟いた。

リリリリリリ……！

弟が我が家に帰ってくるというその日、三女はいつもとはまったく違う朝を迎えた。

(ううっ……もう朝か……)

枕もとで耳障りな音をたてている目覚まし時計を乱暴に叩き、スイッチを切る。

普段ならベッドに入った途端に熟睡して朝までなながあっても起きない三女なのだが、今日はまんじりともせず朝を迎えてしまった。

(ああ、もうっ……どうしてあたしはこんなお子様体質なのよ……ッ)

まるで遠足の前日に興奮で眠れなくなる子供のようだと、情けなくなる。

(こんなだから、いつも試合前日に寝不足で実力発揮できないのよ、あたしのバカ!)  
枕に顔を埋めたまま、じっとしている。今日も部活の練習があるからこのまま寝ているわけにもいかないが、とにかく身体がだるくて重い。

(くっ……どうしてあたしがこんな想いしなくちゃいけないのよ！ みんなあのアホ弟のせいよ！ 帰ってきたら思いきりいじめてやるんだから！)

今年の春、勝手に家を飛びだした弟が数カ月ぶりに帰ってくる。

それを知ってから、三女はずっと寝不足だ。今日などは一睡もしていない。

(だるいのに……なんだか変な気分)

徹夜明け特有の、疲れているのに心はハイという状態のせいか、妙に身体が疼く。

勝手に腰が浮きあがり、太腿がずりずりと物欲しそうに擦り合う。

(やだ、うずうずしてる……こんな朝っぱらからなんて……恥ずかしい)

しかし、一度意識してしまった欲望はますます強くなる一方だ。

「し、仕方ないんだから……このまま練習に行っただって集中できないから……そう、

これはそのためなの……べ、別に、好きでやってるわけじゃないのよっ」

小声で言いわけしながら、そっと指を秘肉へ忍ばせる。

「ひゃうっ！」

そこはびっくりするくらいに大量の蜜で蕩とろけていた。普段はびったりと閉じている

薄い花卉が軽く開き、その奥に隠された小さな入り口から透明な液体を溢れさせている。

(違うの、これは違うの……別に、あのアホのことなんか考えてなんかないんだから

……あたし、弟なんかなんとも想ってない……っ)

目を閉じて弟の顔を脳裏から追い払おうとするが、身体が勝手に動き、柵の奥に隠

してあった一枚の写真を引っ張りだしてくる。

「一樹かずきい……ああっ、アンタのせいなんだから、責任、取れよお……シンッ！」

昨年、まだ一緒に暮らしていた頃の弟の写真を見おろしながら、Tシャツ姿の少女が四つん這いで自慰行為ふけに耽る。

（このアホっ……アンタなんか好きでもなんでもないんだから……ああっ、ダメ、どうして一樹を見てるとこんなエッチになっちゃうのよお！）

その写真には、ユニフォーム姿の弟が写っている。細身だが、しっかり引き締まった腕や太腿を見ると、下腹部が切なく疼いてしまうのだ。

（やだっ、これじゃあたし変態じゃないの……弟の写真をオカズに一人エッチするなんて……ダメ、こんなのやめなきゃ……やめなきゃダメなのにつ）

普段はポニーテールにしている髪が、三女の抑えた喘ぎ声に合わせてさらさらと揺れる。濡れた瞳は写真のなかの弟から動かない。

「はひっ、ひっ、あひっ！ いひっ、気持ちいいひっ……ひっ、やつ、こんなのいけなのにい……ひっ、んひいイン！」

最初は人差し指で軽く陰唇を撫でただけだった愛撫も、今は手のひら全体で秘部を押しつぶすような激しいものになっていた。

「ふひっ、ひっ、ひああっ！ イイツ、これ、気持ちいい！ んあああん！」



枕に顎を乗せ、すぐ目の前にある弟の写真を見つめながら激しく媚肉を擦る。指が愛液で汚れるのもかまわず、乱暴に柔らかい肉土手をいじる。

「ひっ、ひんっ、あひっ！ イイ、イク、あたひっ、もうイクう！」

高く掲げたヒップが悩ましく揺れる。普段はやや陰のある顔が、今は情欲に蕩け、だらしなく開いた口の端からは涎すら垂れている。

（アホ一樹、アホ一樹っ！ イクわよ、あたし、アンタにイカされちゃうわよお!!）  
写真のなかの弟を見つめたまま、三女はついにその瞬間を迎えた。

「イっ……イク……イっく……ウ!! ふうううウンン!!」

枕に顔を押しつけ、必死にアクメ声を押し殺して絶頂する。

（バカ……アホ一樹……アンタなんか……好きなんかじゃないんだから……!）

谷口家の末っ子が戻ってくるその日の朝は、このようにして幕を開けた。